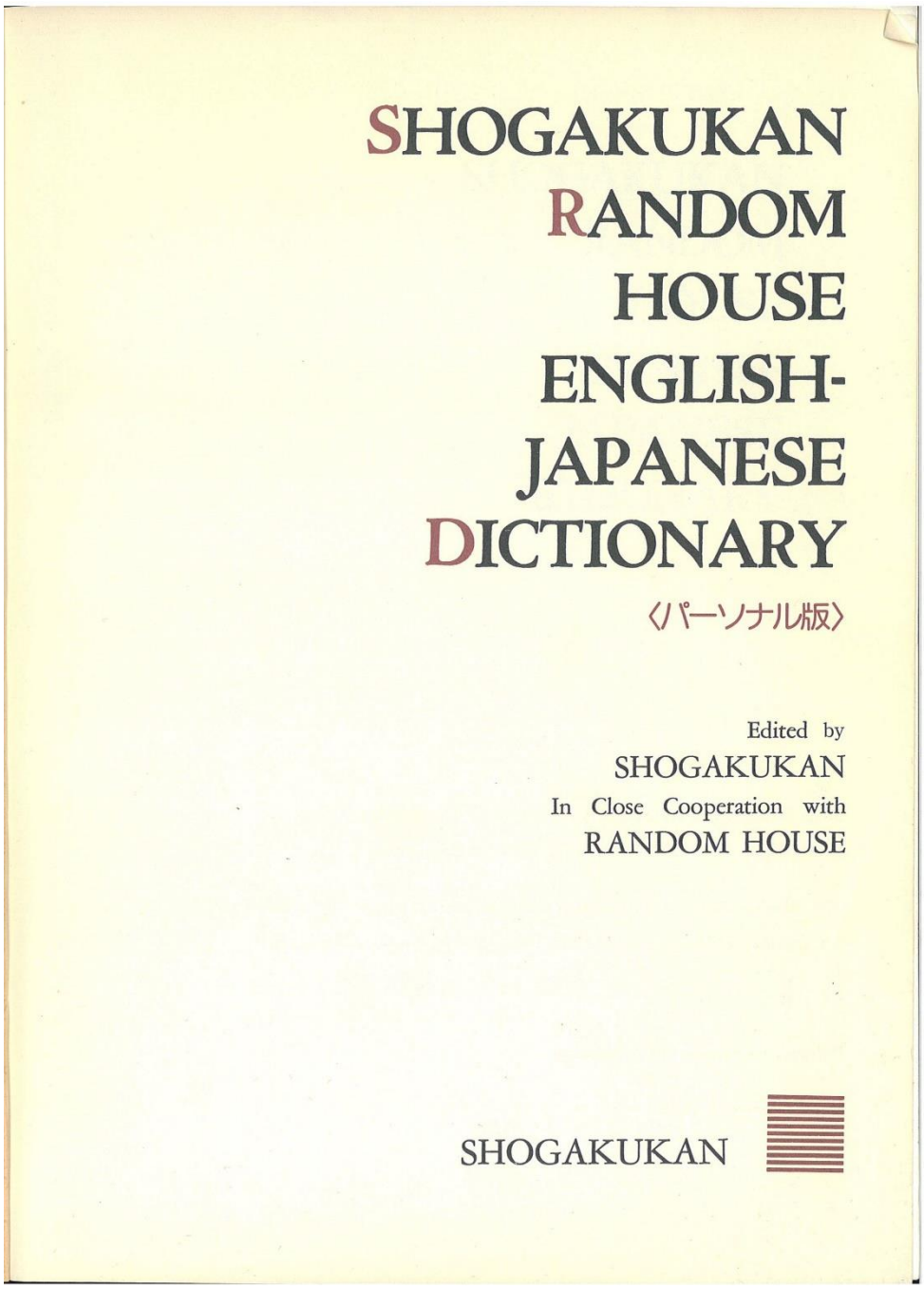
「持続可能性」のこぼれ話

Written by　上村伸二（Shinji Kamimura）

最近「持続可能性」という言葉を耳にする。これは英語の Sustainability の訳語であるが、おそらくこの訳語は、私が過去の翻訳業務で命名したことが始まりであろうと思い、少し触れてみたい。
インターネットもなかった時代、あるビジネス系の文書の翻訳を受けることがあった。その中で、中心的用語として「sustainability」があったのである。「はて、これ何？」と、文書の内容を見ながらも、この用語の業界用語を探したのであるが、なかなか見つからない。色んな辞書も探したが見つからず、英和辞書の本山と呼ぶべき、「小学館ランダムハウス英和大辞典」をめくることにした。下記は、同辞書の表紙コピーである。



追記：
初版 － 1973 年発行。全四巻（その後、上下巻にまとめられたものが 1975 年に、全一巻にまとめられたものも 1979 年に出版される）。
第二版 － 1993 年 12 月発行。収録語数約 345,000。
編集：小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会
「初版 － 1973 年発行」の 1975 年に全一巻にまとめられたパーソナル版からのコピー。

Shogakukan Random House English-Japanese Dictionary
© Copyright 1980, 1979, 1975, 1974, 1973, by Shogakukan

The Random House Dictionary of the English Language—The Unabridged Edition
©Copyright 1973, 1971, 1970, 1969, 1967, 1966 by Random House, Inc.

All rights reserved

Published in Japan by Shogakukan

Manufactured in Japan

SHOGAKUKAN RANDOM HOUSE ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY

SHOGAKUKAN

発 刊 の 辞

All art is a collaboration.

ここに，この書を送り出すにあたって，われわれは，ある感慨をもってこの言葉を想起する。この大冊が，このような形に完成することができたのは，この編集に参加されたかたがたの努力と献身によることはもちろん，ひいては多くの先人たちの築き上げられた業績と蓄積に俟つところが大きいからである。

ひとりの天才の創造によって，あるいは，少数の碩学の努力によって，不朽の名著が生まれ，それらによって英語辞書の歴史は着実にその歩を進めてきた。しかし最近の諸学問，とくに科学・技術等の著しい発達は，おびただしい概念と語彙の膨張を招来しており，いまや多方面の頭脳の結集と共同作業なくしては，これらをカバーする新しい辞書の編集は不可能となるにいたった。

かえりみるに，1960年代は英語辞書史上に一時期を画したといってもよいであろう。ここにおいて，第二次世界大戦以後の英語研究の成果が，語彙において，発音において，語源において，一つの定着を見たのである。1961年，その改訂点をめぐって賛否の議論をまきおこした *Webster's Third New International Dictionary* が輝かしいさきがけをなし，続いて1966年には *The Random House Dictionary of the English Language*—The Unabridged Edition が，斬新な特色を具備して登場したのであった。

これらの壮挙は1970年代に引き継がれ，*The Oxford English Dictionary* が長い間の沈黙を破って，新補遺全3巻の刊行を開始したことも注目されなければならない。

まことに，新しい時代は新しい辞書の出現を要請するのである。

かねて，このような要請にこたえるべき辞書の発刊を企画していたわれわれは，これらの情勢のうちにあって，上記の「ランダムハウス英語大辞典」の中に拠って立つ方針を見いだしたのである。「ことばの辞書」と「ことがらの事典」との融合を実現し，生きて機能する英語を正確に記録するという記述主義をとりながら，規範的立場をも失わないこの辞書のいわば「言語学的に穏健な中道」(a linguistically sound middle course) の中に，われわれは支持し賛同するものを見いだしたのであった。

この辞書の序文で，編集長 Jess Stein は次のように述べている。"We have been guided by the premise that a dictionary editor must not only record; he must also teach." 「辞書編集者は単に記録するばかりでなく，教示しなくてはならない。」という言葉は，英語を外国語として学ぶわれわれには，傾聴に値する宣言であるといわなくてはならない。

この大著のなし遂げた成果の上に立ち，真に日本人に益するところの辞書を編集することができたら，という強い希求をもって，われわれは，この書の版権をランダムハウス社から取得する交渉に踏み切る決意をしたのである。

辞書出版史上にいまだその例を見なかったこの試みは，当然のことながら，かなりの曲折と困難を経なければならなかった。

われわれは，この大著の版権を許与された同社の度量と寛容に感謝する。また編集の全期間にわたり，たえず新しい改訂資料を提供されたばかりでなく，同辞典の編集者を派遣して数々の助言を賜わった同社の友誼と好意に，改めて謝意を表するものである。

この書の長い編集作業の過程にあって，われわれが最も苦慮し努力を傾注してきた編集上の力点は，このすぐれたアメリカの文化所産を移植し，いかにしてわれわれ日本人にふさわしい英和辞書として開花させるかにあった。

原典の簡潔・明解な定義を，そのニュアンスを伝えてしかも的確な訳語に置き換えることはいうまでもない。原典には少ない例文とイディオムを補足し充実させることが最も肝要であった。そのために，米英の現代文学作品・新聞・雑誌などを渉猟して，広範なフィールドワークを展開する必要があった。こうして集められた斬新な用例は，われわれの辞書にかつてないほどの生新さと豊かさを与えることになった。

原典のきわだった特色の一つをなしている専門語を究明していく過程の中では，その領域のあまりの多岐多様のために，闇学事始にも似た苦心を味わわねばならなかった。この過程においては，さいわい各方面の専門家の精密な校閲をいただくことができた。

われわれは，このような英語学界ならびに各部門にわたる専門家諸氏の並々ならぬ労苦に対して感謝の言葉を知らない。これらのかたがたの一丸となった共同作業がなかったら，この書は完成をみることはなかったであろう。

原典の卓抜した諸特色の上に，日本人の使用のために上述のような独自の配慮を加えて，わが国辞書史上に新しいページを開くことを念願したわれわれの試みが，情報化社会といわれる今日において，一つの指針となり，各界の切実な要請にこたえるものともなれば，われわれの喜び，これにすぎるものはない。

1973年9月

小　学　館

小学館ランダムハウス
英和大辞典編集委員会

下記は、検索対象となったページのコピーである。しかし、sustainability はない。基本形である「Sustain」はあるが、派生語として末尾に sustainable はあるが、sustainability はない。

sus·pen·so·ry[2] [səspénsəri] *n.* (*pl.* **-ries**) つり包帯, つりひも, 懸垂帯 (suspensor). [< L *suspens(us)* (→ SUSPENSE) + -ORY[2]]

suspénsory lígament 〖解剖〗提靱帯(ﾃｲｼﾞﾝﾀｲ): ある器官または部分をぶら下げる靱帯; 特に水晶提靱帯, 毛様小帯. → **eye** (図).

sus. per coll. 〖英刑法〗〖もと〗絞首刑相当: 囚人のうちで死刑の決定がなされた者の名前の横に裁判官がつけたラテン語の略語表記. [< L *suspendātur per collum* let him be hanged by the neck]

sus·pi·cion [səspíʃən] *n.* **1** (はっきりした証拠なしに, または全く根拠もないのに, 罪・虚偽・過失・欠点などがあると思い込んで) 疑うこと, うたぐり.
2 疑念, 不信感, 猜疑(ｻｲｷﾞ)心: —*Suspicion kept him awake all night long.* 疑惑の念で一晩じゅう目をさましていた. —*His humility aroused her suspicion.* 彼の謙遜さが彼女に疑いを起こさせた. —*He glanced at them with suspicion.* うさんくさそうに彼らをちらちらとながめた.
3 (事物・人に対する個々の) 疑惑, 嫌疑, 容疑, 疑い: —*a suspicion of cancer* 癌ではないかという疑い. —*There is d strong suspicion against you.* 君には強い嫌疑がかかっている.
4 疑われていること, 嫌疑を受けている状態: —*on* (or *upon*) *suspicion of* …の容疑で. —*above* (or *beyond*) *suspicion* 疑いの余地がない. —*put a person under suspicion* 人に疑いをかける.
5 (…らしいと) 感づくこと, 気づくこと, 漠然とした感じ (vague notion): —*I had a suspicion that he was hiding some trouble of his own.* 彼が何か自分の悩みを隠しているような気がしてならなかった. —*Not a soul had the smallest suspicion of it.* だれひとりそれについて多少ともわかしいと思う人はなかった.
6 〖通例 a を冠して〗ほんの少し, 気味 (trace, hint, suggestion) 〖通例 *of* を伴う〗: —*a suspicion of a smile* ほのかな笑い. —*She acted with a suspicion of humor.* ちょっぴりユーモアをまじえてふるまった. —*There was a suspicion of contempt in her eyes.* 彼女の目にはかすかに軽べつの色があった.
— *v.t.* 〖非標準〗疑う (suspect).
[late ME < L *suspiciōn-* (s. of *suspiciō*) = *suspic-* (var. of *suspic-*, base of *suspicere* to look from below, SUSPECT) + *-iōn-* -ION; r. ME *suspecioun* < AF << L *suspectiōn-* mistrust] **—sus·pí·cion·ful** *adj.* **—sus·pí·cion·less** *adj.*
—Syn. 〖*n.*〗**2** doubt, mistrust, misgiving. SUSPICION と DISTRUST は共に見かけというものは信頼できないという気持を表わす言葉である. ***suspicion*** は見かけの当てにならないことを感じ, そこに信頼できない, 望ましくない, 恐ろしい要素があるかもしれないと強く不安に思う傾向をいう: —*feel suspicion about the honesty of a prominent man* [ある有名人の誠実さを当てにならないものと思う]. ***distrust*** はある人または物に対して確かな信用・信頼が置けないときに用いる: —*feel distrust of one's own ability* [自分の能力について不信をいだく]. **5** idea, supposition. conjecture, guess. **— Ant.** 〖*n.*〗**2** trust.

sus·pi·cion·al [səspíʃənəl] *adj.* (特に病的に, 気違いじみるほど) 疑い深い. [SUSPICION + -AL[1]]

sus·pi·cious [səspíʃəs] *adj.* **1** 疑いを起こさせる, 怪しい, 疑わしい (questionable): —*suspicious behavior* 不審なふるまい. —*The man died in suspicious circumstances.* その男は不審な情況のもとに死んだ. **2** 疑う傾向のある, (特に) 邪推しがちな; うたぐり深い (distrustful) 〖通例 *of* を伴う〗: —*a suspicious old maid* 疑い深いオールドミス. —*She was suspicious as a hare.* 野ウサギのように疑い深かった. —*She was always suspicious of politicians.* いつも政治屋なんか信用できるものかと思っていた. —*A great many people remain suspicious of what they read in the book.* 本で読んだことは当てにならないと思っている人は非常に多い. **3** 疑念に満ちた, 猜(ｻｲ)疑心でいっぱいの, 疑わしく思っている (full of or feeling suspicion) 〖通例 *of*, *about* を伴う〗: —*be suspicious about* (or *of*) …について疑問を抱く. **4** 疑念を表わす, 疑いを示す: —*a suspicious glance* うたぐるような一瞥(ﾍﾞﾂ). —*keep a suspicious eye on* …から疑いの目を離さない.
[ME < L *suspīciōs(us)* = *suspīci-* (→ SUSPICION) + *-ōsus* -OUS; r. ME *suspecious* < AF] **—sus·pí·cious·ly** *adv.* **—sus·pí·cious·ness** *n.*

sus·pi·ra·tion [sàspəréiʃən|-pi-] *n.* 〖おもに文語〗長く深いため息, 嘆息, 長大息 (long, deep sigh). [< L *suspirātiōn-* (s. of *suspirātiō*) = *suspirāt(us)* (ptp. of *suspīrāre* to SUSPIRE) + *-iōn-* -ION]

sus·pire [səspáir|-páiə] *v.* (**-pired, -pir·ing**) 〖おもに文語〗 **—** *v.i.* **1** ため息をつく (sigh). **2** 呼吸をする (breathe). **—** *v.t.* ため息まじりに言う, 嘆息して言う.
[< L *suspir(āre)* = *su-* SU- + *spīrāre* to breathe]

Sus·que·han·na [sàskwəhǽnə] *n.* 〖the を冠して〗サスケハナ川: 米国 New York 州中部から南流し, Pennsylvania 州東部と Maryland 州北東部を通って Chesapeake 湾に注ぐ; 長さ715km.

Sus·sex [sʌ́siks] *n.* **1** サセックス: 英国イングランド南東部の州; 行政上の目的のために East Sussex と West Sussex に分かれている. **2** (牛の) サセックス種: 英国産食肉用赤牛の一種. **3** (鶏の) サセックス種: 英国産鶏の一種; おもにロースター用として市販用に育てられる.

Sússex spániel サセックス=スパニエル: 英国のスパニエル犬の一種; 足は短く, 毛は茶色がかった金色.

sus·tain [səstéin] *v.t.* **1** 下から支える (support, hold, or bear up from below); (建物などが) …の重さに耐える (bear the weight of): —*the columns that sustain the roof* 屋根を支える柱.
2 (重荷・責任などを) 負う, 耐える (bear): —*sustain a burden* 重荷を負う.
3 (傷・損失などを) こうむる, 経験する, 受ける (undergo, experience, suffer); (屈服したり負けたりしないで) 耐え忍ぶ (endure): —*sustain injuries* 損害を受ける. —*sustain a defeat* 敗北を喫する. —*He has sustained a great loss in the death of his father.* 父親の死によって大きな損失をこうむった. —*She sustained his gaze.* 彼の視線にじっと耐えた.
4 (試練・苦難のもとにあっても人・心・気持を) くじけないようにさせる, こらえさせる; 元気づける, 励ます: —*sustain oneself against a person's gibes* 人のあざけりをじっとこらえる. —*The lit-up windows sustained the party with promise of indoor comfort.* 家々の窓にあかりがついているのを見て一行はあの中で楽々と休めると思って元気が出てきた.
5 (行為・過程を) 持続する (keep up): —*with sustained coherence* 終始一貫して. —*sustain a conversation* (*efforts*) 話(努力)を続ける.
6 飲食物と生活必需品を供給する; 養う, 扶養する: —*Charity sustained many poverty-stricken families.* 慈善のおかげで貧乏に悩むたくさんの家族の暮しが立った.
7 (財産や資金を提供して, 施設などを) 維持する (provide for): —*sustain an educational institution* 教育施設を維持する.
8 (主義・学説などを援助または承認して) 支持する (support): —*None of these criticisms can be sustained.* これらの批評のどれも支持できるものではない.
9 (主張や主張する人を) 正当と認める, 是認する, 承認する: —*The judge sustained the lawyer's objection.* 裁判官は弁護士の異議は正当であると認めた. —*This is a difficult claim to sustain.* この主張は認めがたいものである.
10 (ある陳述などを) 確認する, 確証する, 立証する (confirm, corroborate): —*Further investigation sustained my suspicions.* さらに調査をすすめた結果私の疑いははっきりしたものになった.
11 (役を) 巧みに演じる, りっぱにこなす (keep up or represent adequately): —*sustain the character* (or *role*) *of Ophelia* オフェリアの役をりっぱにこなす.
[ME *suste(i)n(en)* < AF, OF *susteni(r)* < L *sustinere* to uphold = *sus-* SUS- + *-tinēre*, var. of *tenēre* to hold] **—sus·táin·a·ble** *adj.* **—sus·tain·ed·ly** [səstéinidli, -teind-] *adv.* **—sus·táin·ing·ly** *adv.* **—sus·táin·ment** *n.*
—Syn. 1 carry. →**support. 3** bear. **5** maintain. **6** nurture; back, abet, held. **10** establish, ratify.

sus·tain·er [səstéinər|-ə] *n.* **1** sustain する人(物). **2** 〖ロケット〗(多段式ロケットまたは誘導弾について) (1) 持続飛行: プースター(booster)の燃料が尽きたあとの飛行段階. (2) そのような段階を維持するロケットエンジンまたはエンジンの集り. [late ME *sosteynere.* → STSTAIN, -ER[1]]

sustáining prògram 〖おもに米〗自主番組, サスプロ: スポンサーのつかないラジオ・テレビ番組; 放送会社自身が経費を負担して製作する.

sus·te·nance [sʌ́stənəns|-ti-] *n.* **1** 生命を維持するのに必要な物, 食物, 滋養物, 栄養 (nourishment). **2** 暮らし, 生計の手段 (means of livelihood): —*get sustenance* 生計を立てる. —*protect their sustenance from the ravages of inflation* 暮らしをインフレの猛威から守る. **3** 支えること, 支持; 扶養, 養育 (process of sustaining): —*sustenance of needy families* 貧困家庭の生活維持. **4** 維持されている状態; 耐久, 持久, 持続: —*the sustenance of life* 生命の維持. [ME *sustena(u)nce* < AF, var. of OF *sostenance.* → SUSTAIN, -ANCE] **—sús·te·nance·less** *adj.*

sus·ten·tac·u·lar [sʌ̀stəntǽkjələr|-kjulə] *adj.* 〖解剖〗支えている, 支えの, 支持する (supporting): —*a sustentacular ligament* 提靱(ﾃｲｼﾞﾝ)帯. [< L *sustentācul(um)* a prop, support (*sustentā-* → SUSTENTATION + *-culum* suffix denoting means or instrument) + -AR[1]]

sus·ten·ta·tion [sʌ̀stentéiʃən] *n.* **1** 存在(活動)の維持; (生活作用による) 生命の維持. **2** 扶養, 扶助; 生計の支え. **3** 生命を維持するもの, 食物, 栄養, 滋養 (sustenance). [ME <L *sustentātiōn-* (s. of *sustentātiō*) an upholding = *sustentāt(us)* (ptp. of *sustentāre*), freq. of *sustinēre* to SUSTAIN + *-iōn-* -ION] **—sus·ten·ta·tive** [sʌ́stəntèitiv, səsténtə-] *adj.* **—sùs·ten·tá·tion·al** *adj.*

sus·ten·tion [səsténʃən] *n.* **1** 維持, 支持. **2** 維持(支持)されている状態(特質). [*susten-* (→ SUSTAIN) + -TION, modeled on *detention, retention* (cf. *detain, retain*)] **—sus·ten·tive** [səsténtiv] *adj.*

sus·ti·ne·o a·las [sustíneòu ǽ:lə:s; *Eng.* SASTÍNIÒU éilæs|-əu] 〖ラテン語〗われ翼を支う (I sustain the wings.). ♦ 米空軍の標語.

su·su [sú:sù:] *n.* (Dobu 島民の間で) スス: 1人の女性とその兄弟およびその女性の子供たちから成る母系血縁集団. [< Dobuan: lit., milk of the mother]

su·sur·rant [sʌ́sə:rənt|sjʌ́sər-] *adj.* 優しく小声で言う, ささやく (whispering). [< L *susurrant-* (s. of *susurrāns*) whispering (prp. of *susurrāre*). → SUSURRUS, -ANT]

su·sur·ra·tion [sù:səréiʃən|sjù:-, sù:-] *n.* ささやき (whisper), サラサラいう音. [<LL *susurrātiōn-* (s. of *susurrātiō*) = *susurrāt(us)* (ptp. of *susurrāre;* → SUSURRANT) + *-iōn-* -ION]

su·sur·rous [sʌ́sə:rəs|sjʌ́sər-] *adj.* ささやきでいっぱいの; しきりにサラサラいう. [SUSURR(US) + -OUS]

su·sur·rus [sʌ́sə:rəs|sjʌ́sər-] *n.* 優しくささやく声, サラサラいう音 (rustling sound); ささやき (whisper). [< L: a whisper]

Su·sy [sú:zi] *n.* 女子の名. **Susanna, Susannah** の別称. (また **Susi, Susie, Suzie, Suzy**)

Su·sy-Q [sú:zikjú:] *n.* スージーキュー: ダンスのステップの一種; おもに Big Apple の一部として演じられ, かかととつま先を交互に動かして, 横に動いて行くステップ; 黒人が好んで踊る. [?]

Suth·er·land [sʌ́ðərlənd|-ðə-] *n.* サザーランド. **1 George,** (1862–1942): 米国の政治家・法律家; 連邦最高裁判所陪席判事 (1922–38). **2 Joan,** (1926–): オーストラリアのソプラノ歌手. **3** (また **Suth·er·land·shire** [sʌ́ðərlənd͡ʃir, -ʃər|-ʃiə]) 英国スコットランド北部の州; 人口13,053 (1970推定), 面積5,253km², 州都 Dornoch.

Súth·erland Fálls 〖the を冠して〗サザーランド滝: ニュージーランドの, South Island 南西部にある滝; 高さ580m.

Sut·lej [sʌ́tled͡ʒ] *n.* 〖the を冠して〗サトレジ川: アジア南部の川; Tibet 南西部から西流しさらに南西に流れ, インド北西部を貫流してパキスタン東部で Indus 川に注ぐ; 長さ1,450km.

sut·ler [sʌ́tlər|-lə] *n.* 従軍商人, 酒保商人: 軍隊について歩いて, 食料品・雑貨を隊員に売る商人. [< obs. D *soeteler* (now *zoetelaar*) = *soetel(en)* (to) do befouling work (akin to SOOT) + *-er* -ER[1]] **—sút·ler·shìp** *n.*

su·tra [sú:trə] *n.* **1** 〖ヒンズー教〗スートラ, 経書: ベーダ聖典の解釈, 祭式の施行法, 律法などを簡潔な語句で伝える文献. **2** 〖仏教〗経, スートラ, 修多羅: 仏教の経典・経の類. Pali 語名は **sut·ta** [sútə]. **3** Panini のサンスクリット文法を構成する約4,000の規則. [< Skt *sūtra* thread, connective cord, rule, technical manual]

Sút·ta Pitaka [sútə] 〖仏教〗→ **Pali Canon.** [< Pali: doctrine, lit., teaching basket]

sut·tee [sʌtí:, ⌒|sʌ́ti(:)] *n.* **1** 妻の殉死, 寡婦の焚(ﾌﾝ)死: 未亡人が夫を火葬するためにきざの火の上に自分の身を投じるヒンズー教の昔の習慣; 1829年に英国人によって廃止された. **2** 貞女, 夫の死に殉じる妻, 殉死寡婦: 自分自身をいけにえにするヒンズー教の未亡人. [< Skt *satī* good woman, n. use of fem. of *sat* good (lit., being), prp. of *as* to be] **—sut·tée·ism** *n.*

Sut·ter [sʌ́tər|-ə] *n.* **John Augustus,** サッター (1803–80): 米国の辺境開拓者; Sutter's Mill の所有者.

Sútter's Míll サッターズ=ミル: 米国 California 州中部, Sacramento 北東方の地域; ここの近くで1848年に金が発見され, 1849年のゴールドラッシュを促した. [その所有者 J. SUTTER の名にちなむ]

Sutt·ner [zʌ́tnər, sʌ́t-|-nə; *Ger.* zʊ́t-nər] *n.* **Ber·tha von** [bə́:rθə vʌn|bə́:-, vɔn; *Ger.* bértə fən], ズットナー (1843–1914): オーストリアの女流小説家; Nobel 平和賞受賞 (1905).

Sut·ton [sʌ́tən|-tn] *n.* サットン: 英国の Greater London 南部の一行政区画; 人口 168,775 (1971).

Sut·ton Hoo [sʌ́tən hú:] サットンフー: 英国イングランド Suffolk 州の考古学上の遺跡; 長さ24mのボートがここで発見されたが, それはおそらく王に敬意を表する記念碑としてアングロサクソン民族が紀元670年ごろに埋めたものと信じら

かつて、海外の某企業評価マニュアル（現在でいう SAS「Sustainability Assessment System：持続可能性評価システム」）で登場した「Sustainability」の翻訳に際し、その言葉の概念がそれまで出現したことのない、まったく新しい発想に基づくものであったため、当時の日本では、社会用語、業界用語としても見出すことはできなかった。簡単にそのコンセプトを言うなら、「経営の持続可能性を考えていくために、企業の事業計画を財務的な視点だけでなく、非財務的な視点も踏まえて、長期的、統合的に検討する評価手法」というところか。ところが、最近では、環境問題への取り組みとして、この用語が使われるようになったようである。

sustainability
【名】
持ちこたえる力、持続可能性◆【形】sustainable
発音 səstèinəbíliti、 カナ サステイナビリティ

"Sustainability and livability really go hand in h
home builder
「持続可能性と居住適性は、本当に両立できるのです」と話す住宅
全文表示

sustainability appraisal
持続可能性評価

sustainability assessment
持続性評価

sustainability assessment system
持続性評価システム◆【略】SAS

sustainability concept
持続可能性概念

sustainability criteria
持続可能性基準◆「基準」の単数形＝criterion、複数形＝criteria
表現パターン sustainability criterion [criteria]

さて、新出のこの用語について、適訳語がないかを、当時は現在のようなインターネットによる検索手段がなかったため、繰り返しになるが、専門辞書を含め、様々な辞書を調べたが見つからず、最終的に前述記載の「小学館ランダムハウス英和大辞典」（初版）が、収録語数も 30 万語を超え、当時としては最も大きな辞書であることから、この辞書をベースに適訳語を検討することとした。調べに調べて、最後に辿り着いた 1 ページであったために、自分としては、このことが記憶に残り、証拠としている。

調べた結果、Sustainability の基本形である「Sustain」が動詞として登場する。原意は主に「支える」ということであるが、語形変化による派生語としては、「Sustainable」は末尾に adj（形容詞形）として小さく記載されているが、その名詞形である「Sustainability」は記載されていない。

左記は、「英辞郎」という Web 辞書サイトで記載されている「Sustainability」の解説冒頭の一部であるが、一般的に社会用語として活用されているものであれば、このように独自の単語として登録されるのが通例である。

しかし、「小学館ランダムハウス英和大辞典」（初版）が編纂された、当時の社会ではこの社会用語がなかったために、単独の用語としては登録されていない。派生語としても、「Sustainability」が記載されていないことが何よりの証拠である。そのように、当時はその概念が新出のものであったため、その文書の記載内容から推察することにしたが、同辞書にもなく、適訳語をどうするかが頭痛の種となった。

翻訳者であれば、時々、経験することであるが、それまで見たことがない用語や表現の場合、既存訳語がない場合「造語翻訳」することはたまにある。パソコン（PC）ソフトの英語版から日本語版への置き換えをローカライズというのであるが、パソコン草創期にはじめてその作業に従事したメンバーの一人が私であったと思うが、その中に CAD 分野の草分け的作図ソフトがあり、その中の機能に、直角になった角をカットしたり、丸めたりする処理があった。そういった機能は、当然のことながら既存訳はあるわけもなく、カットについては「角落とし」「角取り」、「角切り」、とか、メンバーそろって造語を考えながら、「だんだん、将棋の世界になってきたな、だったら飛車取りもあるか？」と談笑したのは、ダイエットを考えることもなかった若き日のことである。したがって、「造語翻訳」は、翻訳者であれば遭遇し得ることであるが、それが適訳語になるか、命名した翻訳者の責任は大きくなる。変更されなければ、訳語がそのまま独り歩きする。

話は前に戻り、基本形の「Sustain」は「支える」が中心的意味合いであるが、「Sustainability」をそれに合わせて無理に訳そうとすると、ぎくしゃくしたものになることは必然。「--able」となれば、「～可能な、～できる」という訳し方にできることはわかっているが、翻訳者として造語を考える場合、なるべく直訳調は避けたいと思う心情が働く。「～可能な」という付随表現は避けて、なるべく端的に一語から、せめて 3 語以内でまとめたいという、何か良い言葉がないか、日本の古語や、古くから一般社会で使われているもので、日本人であればすぐに連想できる、そういう言葉や表現がないか、調べに調べたがなかなか見つからなかった。たとえば、最近話題になった「忖度（そんたく）」という言葉がある。最近の日本人には、「何それ」の言葉であるが、辞書を引くと「相手の身になって考える、おもんぱかる、推し量る、推量する、空気を読む」の説明書き

になっている。論理的な訳にすると「推し量れる、空気を読める」という「～可能な」の意味合いが暗に込められていることがわかるが、この「忖度」は２語で収まり、敢えて「忖度性」としても３語で収まる。

思えば、あの時、このレベルの言葉を訳語に見い出すことができれば、今頃はもっとましな業界用語としてビジネスの場で活用されていたに違いない。

基軸となる「Sustain」の原意訳の点に言及すると、「支える」を中心とした訳語では、文書で記述される概念とも異なるので、適訳語を考えたが思いつかなかった。それで、同辞書の５番目に「持続する」という訳語が出てきたので、辞書中から拾い出せるものとしてはこれが最適と思えたのであろう。しかし、これは先ほどの「--able」「--ability」の派生語になった場合、そのまま直訳すると「持続可能な」「持続可能性」となるのだが、やはり、やぼったく、何とかこの「可能」の意味合いを残しながらも、これを削除して、２語から３語で表現し得る言葉がないか思索したが、なかなか思い浮かばない。

継続、競合、競争、生存、残存、などなど、考えに考えたが、「うーん、うーん」と一人うなるばかりで満足する適訳語は見つからなかった。その結果、「持続可能性」と不満を抱えながらの妥協の造語翻訳となった次第である。決して満足したわけではなく、自分の翻訳者としての能力の無さではあるが、苦渋の決断であった。

この文書の翻訳は、某翻訳会社から依頼されたのであるが、確か 10 章近くであったか、複数章から構成されるもので、その各章の冒頭を含む、重要な記述と思われる解説ブロックを選び出し、私に翻訳を依頼されたが、担当者の話を聞くと、どうも文書すべてが翻訳対象であるらしく、納期も限定されており、複数の翻訳者に分散して依頼されたようであった。それで、すでに作業を少し進めた時点であったか、「そうであれば、１章から３章までとか、「章を区分する形で翻訳を引き受けた方が有難いのですが」と申し上げたところ、担当者からは「いえ、それぞれの章に重要な解説文や用語が発生するので、その部分を上村さんにお願いし、他の翻訳者はその訳文をベースとして翻訳する形になります。したがって、その各章のベース訳が決まらなければ、他の作業者は翻訳を開始できません。ですから、上村さんには、できるだけ早く、先取り抽出した部分の翻訳を仕上げて欲しいのです。」との一言。

確か、年末年始であったか、少しは正月休みをのんびりと過ごせればと思っていたと思うが、なぜそこまでせかされるか、理由を聞いて愕然とした。

今風に、顔文字で表現するなら、「(-_-;)」といったところか？　心の中で叫んだ、「マジかよ、だったら、もっとギャラをはずんで欲しい」と。でも、悲しいかな、言えなかった。

それから、だいぶ年月を経て、それまでは耳にしなかった「持続可能性」の言葉をニュースほか、様々な場で耳にするようになった。あるとき、別件の作業で、担当者と話をすることがあり、「その節はお世話になりました」と言われ、その際、「最近、持続可能性という言葉を耳にするが、私の記憶が正しければ、あの時の案件で私が苦肉の策で造語翻訳したと思うが、あそこから発生したものだろうか？」と聞いたところ、「はい、間違いないと思います。あの時の文書がベースとなっていますから」という返事を聞いた。

おそらく、私が苦し紛れで訳した「持続可能性」が独り歩きしたのではないかと思う。

実は、確認の意味もあって、数年前に、「持続可能性」の商標登録を申請してみたことがある。本来は「Sustainability」という原語があってのことで、それに対する訳語であるので、「持続可能性」が商標登録される性質のものではないと思ったので、商標登録の可能性にこだわりはなかった。また、この言葉はすでに社会で認知され、独り歩きしていることでもあるので、今さら登録は難しいとも考えてもおり、営利目的を目指すわけでもなく、あくまで発案者が自分であるということを確認したかったことにある。

申請した事務所からは、申請後半年ほど経ったころだろうか、「持続可能性」の言葉を、それまでに商標登録の依頼があったことはなかったが、やはり、この言葉はすでに社会で認知されていることから、商標登録は難しいとの審査結果が報告された。そのような結果になるだろうとは思っていたが、私以外に、これ以前に商標登録申請を行った人物はいなかったということは判明した。これは、おそらく自分が発案者であろうと思っていたので、それを確認することができたという点では収穫であった。

翻訳とは、こういう世界である。すべての翻訳者を代弁して言うが、翻訳は、輝かしい、日の当たる世界では

ない。ことさら、何か実績を見せる世界でもない。出版翻訳の世界であれば、訳者として名を記すことはできるが、業務翻訳の世界では名を残すこともない。忍びの世界である。最近は「忍びの妖精」と自称している。この「持続可能性」とて、個人としては、苦渋の選択以外何ものでもなく、傑作と言えるものではない。

しかし、40 数年の翻訳人生の中で、私の友人達からは「でも、自作であることを主張することはできるし、訳者の一里塚になったよね」と言われ、気休めではあるが、少しは何かを残せたかなと、ふと思う。

「傑作」と言えば、日本を代表する医師でありながら、世界的にもトップクラスのテノール声楽家である米澤傑先生と親しくさせて頂いているが、ひょんなことから、先生の応援サイトを作ることになり、そのサイト名を「傑作の会」と名付けたのであるが、これはまさに自慢のネーミングとなった。

URL:　http://kessaku-no-kai.com/

なにせ、お名前が「傑（すぐる）」で、その実績を語るなら、

日本病理学会で最も名誉ある「日本病理学賞」を受賞し、各種がんマーカー等の論文の著者世界ランキング第６位（日本人トップ）の実績を持つ医師でありながら、「天から授かった珠玉の喉、一級のテノールをきいたときにだけに味わえる至福の瞬間」（音楽評論家 黒田恭一氏談）等、世界的にもトップクラスと評されるテノール歌手

であって、「天は二物を与えた」と言わしめるほどの「傑作」である。私的には、「神様は、間違えて一人に２つの賜物を与えたしまった」というのが正しい表現と考える。

今、野球の世界では、メジャーリーグで、大谷翔平選手が、投打の二刀流で有名だが、米澤傑先生は、医学と声楽の二刀流と言える。したがって、「傑作の会」のネーミングは、苦し紛れではなく、まさに的中のもので、自慢の一品である。この米澤傑先生に、「持続可能性」のエピソードをお話したところ、先生の同サイトに「道中二足のわらじ」というコーナーを設けたのだが、そこへ投稿された「考えても仕方のないことと SDGs」の記事に、次のような内容で取り上げられたのである。

http://kessaku-no-kai.com/link1.html

==========
最近、17 色の丸い輪のバッジを胸に着けた方を良く見かけますが、17 の大きな目標と具体的な 169 のターゲットを持つ『SDGs（Sustainable Development Goals)』（日本語訳：「持続可能な開発目標」）を表現するバッジです。最近、テレビ報道でも、毎日、何回も「SDGs」を聞いたり、見掛けたりします。その第一文字の「Sustainable」を「持続可能」と “造語翻訳” なさったのが、上村伸二様です。上村様は、「Sustainability」を「持続可能性」と訳するに際し、「continuable（継続できる)」、「competitive（競争力の高い)」、「survival（生き残れる)」等々の言葉とも比較検討し、想像を絶する苦労の上、「sustainable = 持続可能」と翻訳なさったとのことです。上村様にも申し上げましたが、私は、「sustainable」には「持続可能」以外には適格な言葉はないと確信しています。「continuable（継続できる)」は単に “続いてゆく” というだけで、sustainable に含まれる「支える」という意味が薄いですし、「competitive（競争力の高い)」では「持続性」という意味が薄いです。また、「survival（生き残れる)」では、sustainable に含まれる「余裕」の意味合いに欠けます。「残存可能」では “最低限の段階で残れる” という感触で、「持続可能」のような “崇高さ” がありません。まさに「sustainable = 持続可能」という言葉は、英語も日本語も、それに代わるものはない言葉であると考えます。
==========
はっきり言って、「どうしよう」である。何気なく漏らしたことが、ここまで発展するとは思わなかった。何とか、この部分は削除してもらおうかと思ったが、引くに引けなくなり、後の祭りであった。

翻訳を語ったついでに、もう１つ思い出すものに「エスクロー（Escrow)」というものがある。ある契約書の翻訳で、この Escrow なる言葉が出てきたときには、これも「何これ？　(･_･;　」で、当時の日本のビジネスではなかったもので、簡単に言うならば「契約当事者の間に金融機関のような第三者を仲介させて、取引の安全性を確保する仲介サービス」のことで、もともとはアメリカの不動産売買で使用されているものであった。しかし、ビジネスのグローバル化が進み、国際業務取引が盛んになるようになり、この仲介業務サービスが浮

上するようになったと思うが、それならば、このEscrowを「取引仲介業務（サービス）」と訳せばよいではないかと思うのだが、そう簡単ではない。「取引仲介業務」と訳してしまうと、日本の商慣習に基づいた業務を連想させるために、「エスクロー（Escrow）」独自の業務形態を連想させる形にはならない。
これも、本当に訳すのに悩んだ一品（ひとしな）であったが、確か「エスクロー（米国独自の取引仲介業務）」とした気がするのだが、最近の用例を見ると、「エスクロー」と、そのまま訳さずに使っているケースが多い。当時、契約文書の多くは、実際の契約に文書の文言が影響するために、ある国際弁護士に訳文の最終チェックをお願いできないかと依頼したら、「逆に翻訳をお願いしたい」と頼まれる次第であった。やぶへびだった。

翻訳から、さらに言葉そのものに深堀りしていくと、面白い言葉に出会うことが多い。昔、ラジオ番組で、某水産大学の教授（お名前は思い出せない）でいらしたと思うが、潮流文化というものがあって、海洋の潮流によって、人々が移動する中で、言葉や文化、風習の変遷を見ることができるというものであった。ポリネシア文化の日本への伝統文化への影響にも触れられた気がする。その時に事例の１つで、日本語の「本当（に）」という言葉を取り上げられた。実は、これがヘブライ（ヘブル）語につながるというのである。ヘブライ語と言えば、聖書（正確には旧約聖書）につながるが、この「本」は聖書のことを指し、「本当（に）」は、聖書に手を当てて、すなちわ、「神に誓って」ということを意味するというのである。キリスト教社会では、裁判において、はじめに聖書に手を置いて真実を述べる宣誓の儀式があるが、まさにその行為が日本語で言う「本当（に）」にあたるという話であった。ここで言うヘブライ語は古代ヘブライ語になると思うが、個人的に聖書を長年研究している立場からすると、非常に興味深い話であった。言葉の関連性を調べていくと、実に面白い。

最後に、もう１つ。これはまだ裏取りができたわけではないが、日本語で「文句」と言う言葉がある。日常会話でも、「文句を言う」、「文句を言うな」「文句なし」と口にするが、この「文句」、英語でいうところのmonkにつながりがあるのではと思っている。この英語のmonkは、辞書を引いて頂ければわかるが、実は「僧侶、修道士、修道僧」を意味している。そうすると、ここで連想できるのは、僧侶が語る言葉、いわゆる「説教」あるいは「説法」である。「余計な説教だ」が「文句を言うな」に変化した具合である。

英語のmonkの原型はmono-で、ギリシャ語のmonos= alone(唯一の), single(単独の)からきていて、世俗から隔離して宗教的生活を送る、あるいは一人で祈りに没頭する姿、座禅を組む者と言えば修道士、僧侶となる。それの集合体がmonasteryで「修道会」となる。古代エジプト語のヒエログリフのmngが「文句」につながるという説もあり、そうなると、古代史の観点から、ヘブライ語で書かれたモーセ五書（キリスト教、イスラム教、ユダヤ教の共通部分で、旧約聖書の最初の五書で、創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記から成る）に起源を遡る（可能性もある）。ラテン語や梵語との関連も含めて、聖書考古学やオリエント史に探求心が広がる。

Monkと「文句」に関連性があるかは、完全に裏取りができているわけではなく、もちろん、偶然の産物かも知れない。でも、面白い。ロマンもある。落語のネタにはなる気がする。だいたい、このようなことに関心が向くのは、monkのごとく、世俗から隔離されて、一人で「主よ、お救いください、憐れんでください」と祈りに没頭するようなときである。クライアントからは短納期を要求され、翻訳者から「納期が短い」と言われ、発声練習をかねてサラブライトマンを聴きながらTime To Say Goodbyを歌っていると、妻からは「うるさい」と言われ、子供からはLINEで「お金送って」と一報が入り、インターネットの発達した現在、とても世俗から隔離されているとは言い難く、神に癒しを求めている人の心に、傷口に塩を擦り込むかのごとく、まわりは容赦がない。別の意味でGoodbyを言いたい心境になる。つくづく、まだまだ修行が足りんなと思い、祈りつつ「悔い改める」のであるが、その最中にお腹がすいてくると、つい壊れかけた冷蔵庫を探り「食い改める」のである。その結果、ふとわれに返り、またそのことを「悔い改める」のである。神様が、私を聖職者にしなかった理由だけは悟った気がする。

こんなことを綴っても一銭の得にもならないし、書いていたらお腹もすいた。悟りの境地はいずれということにして、生きながらえている冷蔵庫に、生き残りをかけて「食い改め」の糧を探してみるか。我が家では、納豆にしろ、賞味期限切れのものは、家族はまず私に食べさせる。それで、少し時間が経っても大丈夫そうだと思えば、残りの者が食するのである。これが我が家の持続可能性の法則である。でも、これが世俗の世界である。40数年の翻訳人生も、あともう少しで半世紀、でも、この世俗に埋没されていては、悟りの境地には至れそうにない、多分。

2022年7月「ある晴れた日に」悟りの境地を求めつつ記す

追記：
「生きながらえている冷蔵庫」の弁明をするわけではないが、今、自宅兼事務所を建設予定で、その時にこそ、最新の冷蔵庫をと考えているからと家族には言い訳をしている。今は、国をあげて低炭素社会を目指す時代である。それを反映して、ZEH（Zero Energy Home）（通称：ゼッチ）仕様の住宅が求められているようだ。具体的には、太陽光発電、蓄電池、V2H による電気自動車への充電、などがあるのだが、それを総合的に自治体レベルで目指そうという取り組みとして「SDGs 未来都市選定」があるらしく、なんと今年私のふるさとの薩摩川内市が選ばれた。私の高校時代の同期である田中良二市長が、野田地方創生担当大臣から選定証が授与されたようである（下記 URL をご参照）。この際、自慢話にしたい。

令和４年５月２０日　「ＳＤＧｓ未来都市」選定証授与式 | 薩摩川内市（satsumasendai.lg.jp）

https://www.city.satsumasendai.lg.jp/www/contents/1653018147601/index.html

なんとも、前述の米澤傑先生ご紹介の SDG がここでも登場した。こんなことなら、もっとましな言葉を考えておけばよかった。